

二言語の比較における方言の問題

大野 晋

日本語の方言とされている単語を個々に調べてみると、古い文献にその例があるが、文献上ではそれが途絶えてしまつて、今日の方言にだけ例の見えるものがある。例えばオラブという単語のようなものである。

オラブという単語は、万葉集に「天仰ぎ叫び於良妣ヲラビ」（万葉一八〇九）とある他、日本書紀の訓に「哭声オラビ」があり、平安時代に入つてからの金光明勝王経（西大寺本）に、「手を挙げて号叫（オラビサケビ）哭き」とある。ところが、これはその後の文献に見えないようで、仮名文学には言うまでもなく、類聚名義抄、色葉字類抄などにも見えない。

ところが、室町時代末の「日葡辞書」にヲラビ、ヲラブの形で見え、「大声でわめく」とある。これが江戸時

代の「物類称呼」には

おめきさけぶと云詞のかはりに、九州及四国にて、

おらぶと云

とあり、「浜荻」にも

おらぶ 大音にて呼はることなり

とある。

これが現代の方言では「呼ぶ」意で次の地方で使われる。

大阪府・淡路・徳島県・香川県・愛媛県・高知県・

岡山県・広島県・山口県・島根県・福岡県・長崎県

佐賀県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県

また、「大声で泣く」意としては次の県が報告されている。

島根県・徳島県

これらの方言は区域も広いし、上代の文献に「オラブ」があるから、古語の残存と分かるが、もし、上代中古の文献が亡びていたらどうだろう。果たしてオラブを古語とたやすく認定できるだろうか。

例えばホタルという動詞がある。これは「投げる。捨てる。人を投げ倒す」という意味で、福岡県・佐賀県・大分県・長崎県・鹿児島県・愛媛県・高知県及び山口県に分布している。つまり九州全域、四国と中国地方の西部に分布している。

分布だけを見ると、これはオラブとほぼ同一である。しかし、ホタルには古語の例証がない。そこが違う。

ところが、日本語とタミル語とを比較すると、タミル語には *urappu* という動詞がある。「叫ぶ、大声を立てさせる」という意味である。タミル語の *u* の音は、日本語の *o* の音に対応するから、*urappu* は、日本語の *otaru* に対応する。また、日本語 *hotaru* は、タミル語の *poi-ru* に対応する。また、日本語 *hotaru* は、タミル語の *poi-ru* に音形の上では対応すること明らかであるが、タミル語 *poi-ru* の意味は「投げ落とす、短い距離を投げる、捨てる、ある場所に置く」である。してみると *hotaru* と *poi-ru* とは対応しているように見える。こうした場合、日本語ホタルを古い言葉だと認定できるかどうかが問題

なのである。

このような問題を考える一つの材料となるような例を出してみよう。

タミル語に *patam* という単語がある。その意味は、「タミル語大辞典」に次のように書いてある。

- 1 着物の布。
- 2 色をぬった、色刷りの布。
- 3 コート、ジャケット。
- 4 上着。
- 5 体。
- 6 絵、地図。
- 7 カーテン、テントの周りの幕。
- 8 大きなノボリ。
- 9 目印となる旗、国旗など。

タミル語の *patam* に対応する日本語の語形は、現代語で表記すれば *hata* である。*hata* という語形で、前記 *patam* に対応する意味を持つ語を求めれば、「旗」がまず挙げられるだろう。「旗」(*hata*) というところ、今日の我々は手に手に持つ小旗を思い浮かべよう。しかし、*hata* という言葉は、万葉集では「大海の豊旗雲」と使われているように、大きくなびくものを言った。類聚名義抄を見ると、「幟・柎・旒・旒・旒・旒・旗」にハタの訓がある。幟は目じるしのためのノボリ。柎は色のついた布に、字や模様をかいたノボリ。旒は吹きながし。旒はおそらく旒で、ハタにつける帛である。旒は広げたハタ。旒は先端が二つに分かれた吹き流し。旗は行軍のときに押したてる軍旗。いずれも長く大きい目立つ

ものをいう。これらのハタは、タミル語 *patam* が持つ「彩色した布。大きなノボリ。目印となる旗、国旗など。」という意味と、ぴったり一致することが分かる。

ところが、前記の通り、「タミル語大辞典」は *patam* について、まず「着物のための布」という訳語を挙げている。では、日本語ハタには、そうした意味は無いのかどうか。

ハタオリという言葉がある。これは「機織」と漢字をあてるのが普通で、ハタは「機」にあたると考えられている。類聚名義抄にも「機」ハタとある。しかし、古歌のハタの例の中には、次のようなものがある。

女鳥の わが大君の 織ろすはた 誰が料（たね）

ろかも （古事記歌謡六六）

ここの「織ろすはた」は、「織っていらっしやる布」の意に相違ない。

佐保姫の面影さらず織るはたの霞裁ち着る春の野辺
かな （新勅撰集一八）

この歌の意味は「春の女神である佐保姫の面影とともに織る布である霞を裁断して、自分の着物として着る春の野辺の遊びである」ということである。

水ひきの白糸はへて織るはたは旅の衣に裁ちや重ね
ん （後撰集一三五六）

この歌の意味は「白糸を引きのばして織る布は、旅の衣として裁ち縫って重ねて着ることだろうな」ということである。

青柳の糸織りはへて織るはたをいづれの山のうぐひ
すか着る （後撰集五八）

この歌は「青柳の糸を織って伸ばし織りあげる布を、何処の山のうぐいすが着物として着るだろうか」という意味である。

これらの歌を見ると、「織るはた」のハタは、織物のための機械とか道具ではなく、織り上げた布（着物の生地）である。これはまさしく、タミル語 *patam* の第一の意味である「着るための布」と対応している。

つまり、日本語ハタは本来「着物の生地」であったのだが、それが使われているうちに、「布」には別語のヌノという語が使われるようになり、（その由来は今のところ不明であるが）、ハタオリといえは「布を織る」ことであったのに、「ハタ」はその「織るための道具」の意に移行し、ハタオリで「機械で織ること」の意味ととられるに至ったものと考えられる。

このように、タミル語 *patam* は、「布」「旗」という意味で日本語の *hata* と対応している。ところが「タミル語大辞典」を見ると、別項に *patam* があり、そこ

には「コブラの笠。風（たこ）」という訳語が与えてある。「タミル語大辞典」の編者たちは、patamの「凧」という意味は、「布」や「のぼり」とは関係がないと見て別項に扱ったのであろう。しかし、「のぼり」「吹き流し」は、高くあげて風に当て、ひらひらと布がゆれるのを人々に見せるものである。考えてみれば「凧」もまた風の力を使って高く上げ、目立たせるものであるのみならず、「色をぬった布や紙」を材料として制作されるものである。してみれば「凧」と「のぼり」「吹き流し」は、実は共通点の極めて多いものであり、むしろ類似のものである。だから、音の形が同一である以上 patam は「布」「旗」「凧」という意味を持つ一つの単語と見なす方が適当ということになる。

そこで日本語の方はどうだろうか。

東條操先生の「全国方言辞典」を見る。

はた ① 幟。のぼり。盛岡（御国通辞）

② 凧。たこ。盛岡（御国通辞）・伊勢及び長

崎（物類称呼）・青森県五戸・秋田

県鹿角郡・長崎

とある。「日本国語大辞典」のハタの項には、右の他、熊本県天草島が挙げてあり、「東海道中膝栗毛六・上」の次の文例が引用してある。

おまえ良かはた。吾しよ振り捨てて、よんによう（大分）しやんす（色女）とちぎらんす

ここに使われているハタは凧の意で、「お前はよい凧だ」の意である。

右にあげられている他に、友人館野繁君によると、彼の郷里福島県福島市でも、以前は「凧あげ」を「ハタゲ」と言っていたという。

してみると、タミル語 patam（凧）と日本語 hata とは確かに対応している。

右の三つの訳語のうち、ハタが「布」を意味することについては、例えば「日本国語大辞典」は、「織物の総称」という訳語を与えてはいるが、実はハタは「織る機械」とする方に解説の重点が置かれている。事実、室町時代の「日葡辞書」を見ると、Fata の項に

ハタ（機） 織機。また織機の経糸（たていと）

ハタ（旗、旌） 旗。

とあって、ここには「布」という訳語はない。つまり、ハタを「布」と解することは、一般には失われたのである。そして、ここには「凧」とする解もない。「凧」の意は方言的に地方にだけ残存して、都では消えてしまった。

こういう場合、もし文献的にハタが「布」「旗」の意

だという例が残存せず、方言としてのハタ_{II} 凧だけが残存したとすれば、我々はこれをタミル語 *patam* 中の「凧」の意と直ちに対応語として挙げる事ができるだろうか。

patam の場合は、たまたまその三つの代表的な意味の1、布。2、旗、のぼり。3、凧。の三つともが日本語と対応している。それによってこの三つの意味が一つの源から分化したものだと推定することもできた。もしタミル語 *patam* が対応語として浮かび上がって来なかつたら、ハタの持つ「機」「旗」「凧」という三つの意味を我々は一源のものと認めることができるだろうか。おそらくそれは不可能である。

つまり、「ハタ_{II} (凧)」という場合はそれがタミル語と結びつけて理解できるのは、他の意味との関連を見出せるからであって、それだけが残ったのでは、対応の証明としては極めてむづかしいことになる。

このように考えるならば、対応の材料としての方言には、いろいろな場合があることが分かるが、しかし、だからといって、何でも結びつけてよいかどうかは極めて疑問だといわざるを得ない。